

千葉城北会誌

第 20 号

令和 5(2023)年 11 月

城北会千葉支部

目次

はじめに	2
岡田 光正 (昭35)	
2022年千葉城北会 総会 講演	3
在宅で看取られる人、看取る人 ～それぞれの選択～	
小堀 鷗一郎 (昭31)	
尾崎英二氏を偲ぶ	12
高橋 棟作 (昭31)	
斉藤 徳浩 (昭32)	
於保 洋生 (昭35)	
佐藤 正弘 (昭35)	
近況報告から過去との繋がりを考えた	17
仲野 慎一 (昭50)	
モーツァルト「ジュピター」を演奏する	19
後藤 公一 (昭50)	
青・春・と・は	23
斉藤 徳浩 (昭32)	

はじめに

昨年（2022年）はコロナの状況が改善したことにより千葉支部の総会懇親会を再開しました。在宅診療に携わる小堀鷗一郎先生に「在宅で、看取られる人、看取る人 ～それぞれの選択～」をテーマに東邦大学にて公開講座形式で講演いただき、講演録を掲載しました。2023年度は昨年同様東邦大学にて前学習院大学学長井上寿一氏（昭50）に「日本外交の戦略」について講演していただきました。

千葉城北会誌は毎年発行して、知的好奇心を大事にする千葉支部の伝統を継続しております。今年は城北会のみならず都市・建築城北会、千葉、ときわ支部に多大な貢献をいただきました尾崎英二様が逝去されました。尾崎様には毎年会誌に寄稿いただいております。ご冥福をお祈り申し上げます。

千葉城北会誌は今年で節目の20号に到達しました。皆様からは尾崎様への追悼文をたくさんいただきました。今後とも皆様には千葉支部の活動に奮って参加いただければ幸いです。

令和5年11月

城北会千葉支部会長
岡田光正(昭35)

2022年千葉城北会 総会 講演録

在宅で看取られる人、看取る人 ～それぞれの選択～

小堀鷗一郎（昭31）



今回の会場は東邦大学での講演だが、東邦大学の額田晋先生と祖父の森鷗外と深いかわりがあった。鷗外は61歳で亡くなった。自分がたどった人生に沿った死に方をしたいという人がある一方、何も考えずに亡くなる方もいる。鷗外は病院に入ることは大変な損失だ、病院で1年間安静にしているよりも、働いて1日で死んだ方がまし、医者にかかることもしないという考えの人だった。しかし家族はそうはいかない。鷗外の妻は医者にかかるように泣いて頼んだ。医者に小便を提出しなければならなくなり、その医者が若いころの額田晋先生だった。また鷗外は額田先生のお子様の名付け親となった。

7/7に死亡したが、6/19の日記で「尿差出候僕ノ尿即妻ノ涙ニ候」、自分の体液を人の目にさらすなど耐えがたきことだった。妻のために小便を出したという日記である。

鷗外の長男が戦後台湾帝大医学部から東邦大学医学部長になった。私が勤務している埼玉県新座の堀ノ内病院の小島理事長は私の同級生で、父親同士も同級生だった。小島さんの父親がまた東邦大学外科の医師だった。いろいろと東邦大学とは複数の深い縁がつながっていると感じている。

戸山高校には3回目の試験で通った。小中と成城学園という勉強しない学校に通った。しかし塚原という際立った天才児がいた。医者のお二人に育てられ、禅の研究をし「無とは何か」という論文が国語の教科書に採用された。カリキュラムや試験が無い学校、他の学校に行って答案用紙というものを始めてみたという者もいたほど、自由奔放な学校だった。塚原君から「お前医者になれ」と言われた。「どうしたらいいんだ」と問うと、それには成城をやめて戸山高校に入って東大を受験することだと言われた。父親は画家で母親は森鷗外の娘で

随筆を書いていたが子の教育には興味がない。そこで塚原君の父親が面倒を見てくれることになった。成城をやめてアチーブメント・テストを受けることになった。戸山のガンマ(柴田)先生のところに相談に連れて行ってくれた。塚原さんは結核を患ったガンマ先生の主治医だった。

都立高校の試験を受けたものの合格基準に満たなかったが、当時高校浪人はありえないというので、塚田君の父親の義弟が校長に就任している久我山高校に入れてもらった。一学期に塚原さんに東大の大学院の学生を家庭教師として紹介してもらい、1日おきに特訓を受けた。夏の戸山高校の編入試験を受けたが、当然落ちて途方に暮れた。成城は復学を用意してくれていたようだが断って、深井先生が設立した城北高校に入ることになった。ここから戸山への編入は多かった。2年になるときに3回目の試験で戸山ようやく編入できた。入ってみると秀才だらけで、成城ですべて試験のない世界にいた人間が初めて、人の価値が試験の成績で評価される世界に入った。



写真の後方にいるのが自分で、写真の友人が絶望して自殺することを心配したほどだった。塚原さんはその後も家庭教師をつけてくれたが、卒業まで勉強しても成績は上位まで行かない。

当時卒業生講習会がありそこで1年間勉強した。もともと基礎ができてなかったので1年勉強して東大を受けたが通らない。卒業生講習会の2年目も参加した。当時ブル(藤村先生)やガンマ(柴田先生)など受験のエキスパートがいたので2年間しっかり勉強して3度目の受験で東京大学理科二類に合格した。当時二類から医学部に入るための試験があった。ところが当時東大はサッカーが強かった。ちょうど1部リーグから2部に落ちたところだった。成城で活躍していたので、もう一度1部に上げるという使命感で授業にほとんど出ずに1年間過ごした。そのため医学部に入るのは1年遅れた。結局3年遅れて医者になったことになった。

外科の手術は 40 年間やった。手術中の写真は普通はないが、切除したものをとる目的の写真家が私を写したもので、唯一の手術の写真。



手術道具には凝っていた。リンパ節を切除するため適度なつまみ具合の鉗子など、いろいろと自前で作ったものがたくさんある。職人さんに協力して作ってもらった。例えば耳たぶをつかんでも痛くない強さに鉗子の先を削る。道具を入れるバッグは刃物が入る大工道具入れを使った。



東大に 1993 年まで勤務、その後国立国際医療センターに、設備が整っており患者も多かった。外科部長 3 年、副院長 3 年、この時は半分の手術を担当、院長 3 年で手術は年間 12 回から 8 回そして最後の年はゼロになった。院長の時に橋本龍太郎氏の手術に立ち会ったときに手術現場の独特の雰囲気を出し、この世界に戻るべきと感じた。

そして堀ノ内病院に行くことになった。そこでまた 70 歳まで外科手術をやりまくった。さすがに 70 歳になると技術は持っていても、精神的重圧に耐えられないと感じ手術は卒業した。

2005 年に手術をやめた後は外来か病室をやるかであったが、当時在宅医療などは考えもしなかった。厚労省が本腰を入れたのは 2006 年くらいから。手術だけやっていて処方箋など書いたことがなかった。外来は嫌いで 25 人も対応するとうんざりする。たまたま小児科を担当していた医者が訪問していた患者が重症で気管切開をしていた。私は現場を見て大

変驚いたが、これが在宅医療の初めての経験だった。

手術に取り組んだ40年の後の20年については付け足しのようなもの。マスコミが言う小堀が最後にたどり着いた究極の医学は「看取り医学」だというような勝手な解釈には閉口する。私が本当に命を懸けたのは外科手術。後半の20年は毎日がエキサイティングだけれど命を懸けるというものではない、語弊があるが生活のためには楽しくはないこともやらざるを得ないという面もある。

何年もお風呂に入っていない人の耳元で大声で伝える。鼻で息せず口で呼吸しないとやっていけないなんてことが普通。社会的格差、家族とのコミュニケーションの途絶などが、現在対象としている人々の背景にある。

半年前の話だが100歳のお婆ちゃんがいる、頭はクリアだが聴覚障害で筆談、体は動かない。看ているのは76歳の娘さんだが認知症。金もないし、他に助けてくれる縁者もいない。お役所は通り一遍の対応しかしない。おばあちゃんの悩みは、認知症の娘が徘徊してしまうこと。わかっていても動けないので人に言えない。ある日訪問したら亡くなっていた。外科医の時は生かすのが仕事だったが、今度の仕事はそれもあるが、それがかなわない人を相手にする仕事。



在宅医療の道に入って20年、今日のテーマは「看取られる人、看取る人、それぞれの選択」。いくつかの事例の中から一つ紹介する。

76歳男性の場合。妻と2人の老々世帯である。他の病院で胃がんの切除手術を受けたが11か月後に再発。再入院していたが自宅に帰ることを強く希望し自宅療養することになった。初めての訪問診療時はひどく痩せて腹水がたまり食事がほとんどとれていなかった。本人の第一声は「好きな酒が自由に飲みたい」であったので、その場で「好きなだけ飲んでよい」と許可した。介護する妻もヘビースモーカーであったが、これも夫が許す限り喫煙自

由とした。翌日から患者は妻が買ってきたニッカウイスキーのホームサイズのプラボトルに吸い口をつけ、いつでも飲みたい時に飲めるように枕元に置くことにした。それと同時に一時的ではあるが食欲が旺盛となり、枕元には鰻、寿司などの弁当の空箱が山積となって置かれるようになった。最期を迎えるまでの2か月の間、訪問して褥瘡の処置をするのが、妻のタバコのもうもうたる煙の中での唯一の医療行為であったといえる。ある日ふと思いついて昔患者から贈られたジョニーウォーカー青ラベル、当時黒ラベルよりもさらに高級といわれ長年保存していたものを、患者に進呈しようと箱を抱えて病床に持って行った。患者はとても喜んですぐに味見をしようということになったが、なにぶん年月を経た品だったのでコルク栓は劣化していた。栓抜きなどなくスプーンの柄を使って長時間かけてコルクを取り除き、大量のコルクくずと一緒に乾杯した。患者は嬉しさのあまりもうすぐ生まれる孫に私の名前をつけると言い張ったが、私は祖父となる患者と私の名前を組み合わせ「久一郎」としてはどうかと提案して折り合いがついた。しかし提案は母となる娘に即座に却下された。」

幸田文の小説の中に父露伴の死を主題としたものがいくつかあるが、そのうちの一つ「父・こんなこと」にこのような一節がある。

停電の夜にマッチを擦って病床にある父の安否を確かめる場面である。「まるで父にして父でなき物だった。……その目、義眼もまだよい、魚の目もまだまだ。しかし父の目だった。いや誰かの目だった。知らない人の目だった。見たこともないトロっとした目があっけらかんとただあいていた。火が消え嫌な気持ちが濃くなり父のそばが離れたかった。逃げたかった。私が父にして父にあらざる物を見て恐れおののいていたものは実は父の体の上へ死が這い上がっていたのだ。私は死の顔を知らなかっただけである。」

文学的にいえばこのような表現になるが、昔は身近で人は死んだので、死は特別なものではなかった。最近ほとんど病院で亡くなるので幸田文のような経験をしない。親子の関係でもこのような恐れがあるということ。

アパートの大家はアパートで死なれると事故物件となり、契約が不利になる。先生が親身に来てくれていることはわかっているが、大家の立場も分かってほしいという。行政もこれに近い立場。

「看取りの家」は四国で成功した施設だが神戸須磨区で住民の反対にあって断念した。火葬場反対と同じ理屈。死は忌まわしいもので距離を置くべきものという考え方。TOC（戸山高校オープンカレッジ）の講演で「あなたはどこで死にたいですか」というタイトルにした。校長が純粋な高校生にこのタイトルでは問題あるのではと言ったが、私は高校生に聞かせたい、大人になってからでは遅いからと押し切った。

最果タヒさんの話、「日本は、死を穢れとする風潮がまだ強く残っていますよね。それってどうしてだろう？ という気持ちがすごくあるんです。結局誰しものが死ぬのに、死のことを語ってはならないとするならば、本当に死のことに直面している人だけが、死について考えなくてはならなくなって、とても孤立してしまうという感覚をずっと持っています。もちろん、人によって極度に死を恐れる人もいるはずですし、それはその人の人生によって培われた感覚だから、むしろ絶対に尊重されるべきと思います。ただ、発信する側としては、発信する／発信しない、のどちらを選ぶにしても、「みんな」そう思っているからやめましよう、「みんな」のせいにするのはよくないんじゃないかと思ったんです。」

医者でも同じ。日本医師会雑誌に寄稿した最初のタイトルが「生かす医療から死なせる医療へ」として、編集者から指摘があって多少乱暴だとは思ったので「命を永らえる医療から命を終えるための医療へ」と修正したところ、内容を読めばわかるが、タイトルだけ見たら誤解されるということで、最終的には「在宅における患者の看取り - 死を恐れず、死にあこがれず」になった。日本医師会としては医者は命を伸ばすことにしか価値を認めないと言わざるを得ない。

看取られる人、看取る人のそれぞれの形を紹介したが、当人だけでなく、家族や周りの社会もある。医者も関与する。しかし在宅死を望んでもすべての人が実現することは難しい。20年にわたって630人ほどの患者を診てきて生と死とは近いものだということを実感している。これは自分の年齢もある。今のところ検診をしないので病気も見つからない。

成城時代の親友の出井伸之（元ソニーCEO）が年初の新聞対談で120歳まで生きると言っていた。ところが私も治療にかかわったものの6月に亡くなってしまった。生前氏が京都の書道家に書を習っているというので、生と死を重ねて色紙に書いてくれと頼んだ。そうしたら生が表に出ているものを書いてきたので逆にして書き直してくれと頼んだ。これがきっかけで死んだとは思わないが2年ほど前の話。



糸井重里氏と対談で本を出した。また NHKBS1 でドキュメンタリー番組を作った。評判が良くて12回の再放送があった。100分以上の長尺番組が10回以上放送されたものは3本しかないそうだ。「東風」という映画会社が目をつけて権利を譲り受けた。しかしコロナの影響で映画は売れなかった。作品に関して糸井重里が以下のようにコメントした。

死を健康に考える

なぜかぼくたちは死を暗いところに追いやってしまった。

そのおかげで

生きることが楽しくなったかという

決してそんなことはない。

死とちゃんと手をつなぐことができれば

生きることにつながっていくと思います。

—中略—

ぼくはだから、あんがい若い人に

この映画を見てほしいと思っています。」

出典：ほぼ日刊イトイ新聞「いつか来る死を考える。」糸井重里

人生を しまう時間

とき

監督 下村幸子

プロデューサー 福島広明

撮影 下村幸子

編集 青木親帆 渡辺幸太郎

制作 NHKエンタープライズ

製作 NHK

配給 東風

2019年 日本—110分—DCP

ドキュメンタリー

©NHK

おだやかに、心を寄せて



患者と家族と向かい合い、最後の日々をともに過ごす——
小堀鷗一郎医師(80歳)と在宅医療チームに密着した200日の記録

www.jinsei-toki.jp

さくら 茨木のり子

ことしも生きて
さくらを見ている
ひとは生涯に
何回ぐらいさくらをみるのかしら
ものごころつくのが十歳ぐらいなら
どんなに多くても七十回ぐらい
三十回 四十回のひともざら
なんという少なさだろう
もっともっと多く見るような気がするのは
祖先の視覚も
まぎれこみ重なりあい霞だつせいでしょう
あでやかとも妖しとも不気味とも
捉えかねる花のいろ
さくらふぶきの下を ふららと歩けば
一瞬
名僧のごとくにわかるのです
死こそ常態
生はいとしき蜃気楼と

尾崎英二氏を偲ぶ

追悼・尾崎英二君 その使命感はどこから？

高橋 棟作（昭31）

尾崎英二さんが、令和5(2023)年3月15日に急逝されました。お手伝いしていた仕事の関係で、4月初頭ご自宅に電話をしたところ、お取り込み中の奥様から事情を明かされ、慌てて城北会に確認・処置の依頼をしたものでした。高齢者の一人として「まさかの時の手順を家族に知らせておく」必要性を身近に感じる出来事でした。

尾崎さんとは、戸山高3年の同クラスですが、在学時代のお付き合いは薄く、2006年に卒業50周年の文集を創るあたりからの関係で、『千葉城北会』では、平成18(2006)年11月18日に総武線本八幡駅近くの八幡会館での会合に誘われて以来です。

尾崎さんは、城北会千葉支部のみならず、都市・建築城北会、ときわ城北会など同窓生親睦会の設営に熱心で、同時に城北会本体においても、会誌・広報（広告）などに理事として精励されました。そのあたりの経緯を御自身で記述した文章があります。

『城北会と私 尾崎英二 柴田治先生没後30年・記念文集（2015-10-7）』より引用
理事となった経緯・・・昭和31年卒の城北会理事は初期には柴田治先生が指名して、東芝・岡田恒明さん、東ガス・平塚裕康さん、東電・手塚和昌さんと続いてきたのですが、ある時のクラス会の席上で突然手塚さんから「今度自分は福島に転勤になるので理事をやめざるを得ない。ついては転勤の心配のない（当時、私は独立して建築設計事務所を営んでいた）尾崎君にやってもらいたい」と言われ、初めて城北会との縁ができました。

千葉城北会のこと・・・理事会のメンバーであった大槻清彦先輩（S11年卒、当時千葉城北会会長、「辞典・大言海」編集者大槻文彦氏の孫）から松戸在住だねと声をかけられ、千葉城北会に参加するようになりました。平成10(1998)年から事務局長を務め、平成19(2007)年からは会長を5年ほど務めました。

都市・建築城北会のこと・・・過去に航空城北会と言うものがあり、参加を誘われた経緯があります。職業別城北会も良いと思い建築城北会を作ろうと思立ちました。東大同窓の建築関係者に手紙を出し、8名ほどが集まりました。最年長の椎名國雄先輩（S28年卒、元東海大教授）に会長をお願いし、私が事務局長となりスタートし、東大生産技術研究所や、東京芸術大学などの見学や講演会を行い、その後も無事継続しています。

私は城北会のいろいろな会合に参加させて頂き、多くの先輩・後輩と知り合いになり、楽しい時間を過ごさせて頂いており、改めて柴田先生や手塚さんに感謝いたします。

(引用終わり)

友人から『後事を託された』のが、「使命感」の源泉だったとすれば、それは十分に果たされたのでは無いでしょうか。敬意と共に、ご冥福をお祈り申し上げます。

尾崎英二氏の急逝を悼む

齊藤 徳浩(昭32)

あまり急なことで信じられません。

上野駅1階のターミナルホームの改札口近くに「いろり」という居酒屋があり、そこで一杯やろうと約束していたところでした。それが亡くなったと聞いて唖然としています。

私が千葉城北会に出るようになったのは尾崎さんの誘いがあったからです。平成16年(1995)当時、船橋の三田浜楽園(塩田のあと)で城北会千葉支部は行われており、尾崎さんは私が行くと旧知の間柄のように親しみやすい笑顔で迎えてくれました。それまで同窓会など敬遠していたのが、いっぺんに氷解して仲間に入れていただきました。

東大出の建築家としてマンションの大規模修繕などを得意として活躍しておられました。

尾崎さんとは支部会誌の先輩インタビューによくご一緒させていただきました。元特攻隊の堀山久生氏、頭の体操の元千葉大教授多湖輝氏、元NHK解説委員長中島勝氏など一緒に取材に行ったことを今でも鮮明に覚えています。

親しい先輩を失ったことを寂しく思います。ご冥福を祈ります。

大先輩を偲ぶ

於保洋生(昭和35)

今年(令和5年)は、1月に不慮の交通事故で、私の人生上の大先輩である、有名な画家の長縄えいこさん(同じマンションの在住だった)を亡くし、そして3月には、都立戸山高校の同窓会(城北会)で、本部や千葉城北会やときわ会で、大活躍されていた、私が兄とも思って慕っていた、大先輩、尾崎英二さんを病気で亡くし、そのショックで嘆き悲しんでいます。心から哀悼の意を表します。私が勤務したT社の先輩の逝去の際にも痛感したのですが、御在命ならば、もっといろいろとお聞きしたいこともあり、更には、いろいろ、ご

一緒に活動したいことも多くありました。後悔、先に立たずです。

尾崎英二さんとは昨年12月に来柏されて、いつもの様に馴染みの場所で会食しながら、城北会の今後など、意見交換して、その後、正月に、恒例の年賀状のやりとりを済まして、(本当に筆豆な方でした)、私の住んでいるマンションの4年後の大規模修繕に対するアドバイスをお願いしたりしていました。

ところが、「3月15日に入院中、突然亡くなられた」という悲報を、4月になって受けて、思わず【えッ】と絶句してしまいました。

尾崎さんは、城北会では、高田馬場の城北会本部や、千葉城北会、そして、元、柏駅近くの北小金にお住まいだったこともあり、常磐線沿線のときわ会の活動に幅広く注力されていました。

また、その広い人脈を生かして、戸山高校の偉大な大先輩方(山田元警察庁長官、森鷗外のお孫さんの小堀欧一郎さんなど)の「先輩インタビュー」を、新宿のピラスで中心になって行って、活字にしたり、総会で、講演会を実施されていた中心的なご活動は感動的で、私も幅広くサポートしていたこともあり、感慨深い思い出であり、更に、今後も城北会としてもぜひ継続して頂きたいと思っています。

尾崎さんは、東大工学部を卒業された後、クラレに勤務されて、その後、一級建築士事務所を開かれ、幅広く「アンチ悪徳業者」をモットーに不動産業界でアドバイザーとして活躍されていました。

更に、尾崎さんは、月下氷人的な縁結び人的にも活動されていました。私の息子が同じ東大OBだったので、有名な国語学者の素晴らしいお嬢さんを紹介して頂き、無事ゴールインして、今や、私の孫が小学校1年生になっています。ありがとうございました。

尾崎さんは、歌もお好きで、船橋での千葉城北会総会後の幹事会で歌った、城北会の先輩、宇田博(一高、東大、元TBS常務)の「北帰行(窓は夜露に濡れて、、、)、昭和36年頃小林旭がはやらした」や浜口庫之助の「恋の町、札幌」や柏の総会後に寄ったカラオケで絞めにうたった「高校3年生」などが、尾崎さんの笑顔と一緒に今でも楽しく思い出されます。城北会の今後の発展を陰ながらお祈り頂ければ幸いです。

長縄えいさこん、1月6日に不慮の交通事故で亡くなられたという悲報を受けて、「えっ、何であの女史が」と悲しみにひたりました。

同じマンションにお住まいでしたので、竹島さん宅で時々、会食をしたり、毎日の様に、散歩されている時に話し掛けて、人生上のアドバイスもいろいろいただきました。本当にありがとうございました。

長縄さんは、画家としては、勿論のこと、それ以外でもそれぞれ各分野で秀でた第一人者でした。

例えば、絵画教室をされていた同じビルのカラオケで拝聴した、原語のシャンソンも、素晴らしかったです。

又、自治会関連では、私が自治会長をやっている時に、イベントの運動会のPRチラシを書いて頂き、それ以降、いろいろなイベントのPRチラシもお願いすることが恒例となりました。

「老婆は一日にしてならず」では、お馴染みの絵と巧みな文章で、拝読させて頂きましたが、絶筆になってしまったのは、大変残念です。また、安孫子教育委員会のメルヘン文庫の審査委員長にも成られて、幅広く活躍されていました。

心残りなのは、人脈の広がった、長縄さんに、石戸新一郎さんと流星代表の辻野弥生さんをご紹介して頂こうと思いつきながら、かなわなかったことです。

思い出すままに

佐藤正弘（昭35）

酷暑といわれる暑い夏である。80歳をすぎると記憶がうすれてくる。昔を思い出すまま綴ってみようと思う。

40年ぐらい前に市川に住んで居たころ、近くの子供行きつけのお医者さんから電話があった。君は戸山の出身だね。千葉城北会というのがあって近く会合がある。一度来てみないか？というお誘いであった。大先輩でありお世話になっている篠塚先生「18年卒」なので即決した。

確か船橋の三田浜の料理屋で初めての出席でした。「頭の体操」の多胡先生の講演で楽しめた。その著書はベストセラーで原稿料目当てに自宅訪問大口預金を獲得した。その後船橋グランドホテルに会場を移して、尾崎支部長、斎藤副支部長の時代になる。当時会計担当が、同期の本橋君で、まじめで熱心な方でした。親しくなると体調が今一つと聞いていた。講演会の講演者に丁度経済企画庁を退官した糠谷真平君が同期だったので国会民生活センターの理事長の立場から、「消費者問題の登場と政策展開」、偽牛缶詰事件、サリドマイド事件、PCB問題、生命、身体を脅かす事例多発等面白い講演になった。

驚いたことに本橋君が欠席だったので、自宅に近いこともあり、訪ねた。奥様から肺の調子が悪いと聞いた。会計処理等支部長と相談して引き継いだ。その後帰らぬひとになった。

この頃(2009年)の出席状況ははがき220通出席者30名前後であった。その後後輩の白石、仲野さんに引き継ぎはがきからメールに近代化した。支部長も若返り、岡田、於保体制になった。

城北会で多いのは、高級官僚で、同期で、堀籠君が最高裁判事退官で、「司法のあり方」と題する講演を、これも同期でノーベル賞候補となった「リチウムイオン電池」の水島公一君の話も高邁な講演だった。

突然の事でしたが、最近長年支部長としてご活躍いただいたお二人がなくなられた。残念

でならない。おひとりは、29年卒の斎藤和子さん、もうおひとりは、31年卒の尾崎英二さんである。おふたりともその道の泰斗であつた。斎藤さんは、精神衛生、看護学で活躍、尾崎さんは、建築設計の分野で、ご活躍された。斎藤先生は、女傑で現支部長がお好きなカラオケクラブでの軍歌の斉唱がなつかしい。尾崎さんは、優しくジェントルマンで学者でもあつた。

この城北会千葉支部が現在の岡田支部長の下で益々の発展をされることを祈念してやまない。

近況報告から過去との繋がりを考えた

仲野慎一（昭50）

先日、かれこれ43年前に同期入社したA君から、同期会を開催するので欠席の人も含めて「近況報告」を提出するように連絡を受けました。その近況報告を加筆訂正してまとめ直してみました。

9月の手帳を見返して過去1ヶ月間の近況を羅列しながら、それが自分の過去とどう繋がっているか、思い出も含め一言ずつコメントしてみました。

9/2、自宅の津田沼から本八幡の娘一家の住まいに寄り下の孫に誕生日プレゼントを手渡し。その足で新宿にて久々に開催された戸山高校アメフト部OB・OG会に出席。（⇒現役や指導陣はコロナ禍による部員激減に苦慮しているが、私が在籍した50年前もタッチフット最後の学年として部員6名の危機だった）

9/4、千葉で映画「福田村事件」（関東大震災後に千葉県野田市付近で起った虐殺事件が題材）を鑑賞。（⇒映画での被害者は香川県から行商に来ていた日本人だが、朝鮮人の犠牲者は5千人超と言われており、私が小学校や大学で知り合った韓国系の友人のこと等を思いながら鑑賞）

9/9、会長兼庶務係を担っている「習志野シニアクラブ」映画鑑賞会で「嘆きのテレーズ」（1953年・フランス）の上映会。（⇒私の親世代くらいの方がセレクトされる古典的名画が多いのだが、この作品は亡くなった両親は観てなかったかな？）

9/10、地元習志野を練習拠点にするアメフトチーム強豪「オービックシーガルズ」のリーグ初戦の応援に出向き完勝！（⇒このチームは、今はなきレナウンの流れをくみ、同じグラウンドを引き継ぎ練習している）

9/12と9/14、春の市議選で応援した市議会議員の議会質問を傍聴。（⇒私の両親も、保革の立場は微妙に異なりつつも政治に関心が高かった）

9/15と9/21、幕張と習志野で3年前から毎月定例開催している「絵本でテツガク対話する会」（今月の参加者・計12名）。（⇒高校時代に好きだった教科「倫社」のうちの倫理を学び直している感じ）

9/16、絵本に関するシンポジウムが東京国際フォーラムであり参加。（⇒高校時代の選択科目「美術」は消去法で選んだが、今はもう少し自発的かな？）

9/18、東中野のミニシアターで上映されたドキュメンタリー映画「国葬の日」を鑑賞。その後、代々木公園での「さよなら原発イベント」の一部に参加。（⇒ほぼ同じ頃に生まれた故・安倍氏や岸田首相を見ていると、我々の世代は後世の人たちにどう評価されるのだろうか？とってしまう）

9/24、習志野での100年前の朝鮮人虐殺に関する講演会に地元で参加。（⇒「発想が飛躍しすぎ」と批判されるかもしれないが、AIを駆使している21歳の藤井聡太名人が「温故

知新」の大切さを述べているのを思い出した)

9/26、千葉県 14 区（増区された新選挙区。衆院選の区割り変更で千葉県は 1 議席増）の市民連合の事務局打合会に参加。（⇒私が 41 年前に千葉県民になった時より前から「金権千葉」と言われ続けてきたが、今も収賄容疑で現職の国会議員が逮捕される現状を少しでも変えたいと思う）

9/30、「習志野シニアクラブ」で企画した対話会「女性市議とジェンダーを話そう」を開催（参加者・9 名、市議 2 名）。（⇒37 年前、私が 30 歳のころ「男女雇用機会均等法」が施行されたが、すっかりジェンダーギャップ後進国となってしまった）

9 月は何かと東京都内に出向くことが多かったのですが、普段はせいぜい数キロ四方のエリア内で自転車利用をメインにしてうろちょろしています。

モーツァルト「ジュピター」を演奏する

後藤公一（昭50）

高校の時には管弦楽部に所属し、大学・社会人のアマチュアオーケストラで演奏した経験もあったので25年のブランクの後、シニア世代になってコントラバス演奏を再開し、八千代交響楽団で弾いています。今年、天才作曲家モーツァルトの「ジュピター」交響曲を演奏する機会があり、この曲の魅力を曲目解説風に紹介したいと思います。

交響曲第41番 ハ長調 K.551「ジュピター」はモーツァルト（1756-1791）が1788年に完成させた最後の交響曲です。この曲の依頼者、作曲の目的や初演については不明で、おそらくモーツァルトは初演を聞かずに亡くなったと推定されます。



同世代のドイツの音楽興行師であったザーロモンがローマ神話の最高神「ジュピター」の愛称を与えたと伝えられています。

後年リヒャルト・シュトラウスは、「ジュピター交響曲は私が聴いた音楽の中でもっとも偉大なものである。終曲(第4楽章)のフーガを聴いたとき、私は天にいるかの思いがした」と称賛しました。

第1楽章 Allegro vivace（快活に速く） 4分の4拍子

冒頭は楽譜①の通りですが、ドの音の3連打で力強く始まり、次に優美な動機が登場、そしてソ音の三連打、再び優美な動機、そして力強い軍隊調の音楽となります。楽譜②のような力強い部分だけをつなげても音楽として違和感はないのですが、力強い動機の間にも優美な動機を挟むことで、曲想の変化を楽しむことができます。その後もさらに多彩な性格の動機が現れ、人間の感情の移ろいを感じさせます。

第1楽章楽譜①



第1 楽章楽譜②

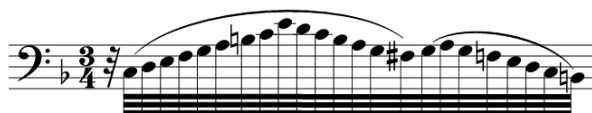


好色のジュピターが堂々と登場し、お目当ての女神を口説きにかかります。女神は軽くなしながらも次第にジュピターになびいていきます。激情したり口論しながらも、ジュピターの恋は成就するというストーリーを想像してしまいます。

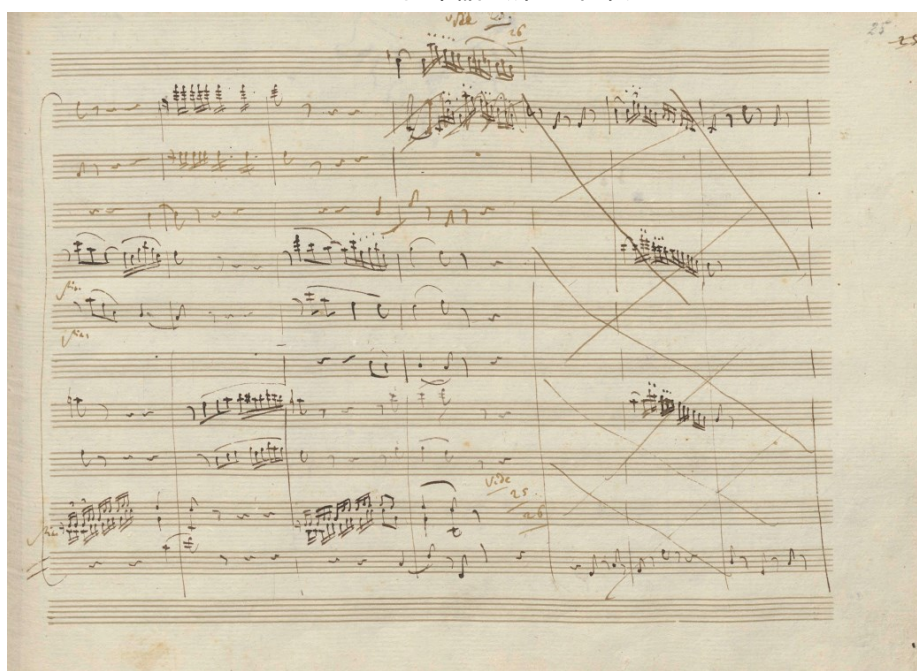
第2 楽章 Andante Cantabile (歩くような速さで、歌うように) へ長調、4分の3拍子

穏やかなカンタービレで始まりますが、19小節目で急に焦燥感のある不安な影が差します。この対比の妙が印象深いです。再現部では全ての弦楽器が3 2分音符のスケール（楽譜参照）を弾いてクライマックスを形成し、再び穏やかになって終わります。モーツァルトには珍しく総譜（自筆譜）には大きな修正の跡が残っています。新しい音楽の境地を模索していたモーツァルトの強い意志と苦悩が感じられます。

第2 楽章楽譜



モーツァルトの自筆譜（第2 楽章）



第3楽章 Menuett Allegretto(やや速く) 4分の3拍子

舞曲であるメヌエツトとしては速めのテンポであることと、舞曲とは捉えにくい半音階進行(楽譜①)で始まります。中間部のトリオはとぼけた調子から突然短調のフォルテ(楽譜②)に変わり覚醒します。従来のメヌエツトにはない刺激的な音楽です。

第3楽章楽譜①



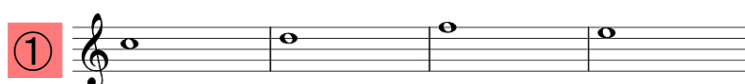
第3楽章楽譜②



第4楽章 Molto Allegro (非常に速く) 2分の2拍子

ド・レ・ファ・ミの「ジュピター音型」(動機①、以下の楽譜参照)で開始します。この音型はあらゆる場面に時には姿を変えて登場し、この楽章を支配します。続いて動機⑤、③、②の順に登場します。動機②の前半の2分音符が提示部、展開部で輪唱の様に出てきます。展開部で動機⑤は上下反転したものも加えてこだまのように繰り返され、その隙間には動機①を短く圧縮したものが使われます。

第4楽章の5つの動機



①の上下反転形



(上下反転形を含む)

終結部のフーガは圧巻です(以下のカラーの図表参照)。これは前のページの5つの動機を色で弦楽器に当てはめ、さらに管楽器を加えて楽譜を表現した図表です。動機⑤から始まり、動機①の上下反転形が現れます。そして動機①を先頭に5つの個性ある動機が順次弦楽5部と木管パートに割り当てられ、規則性をもって模倣反復されるフーガの技法が驚くほど整然と展開されます。モーツァルトにとって初めての試みでしたが、古今東西このような完成度の高い作品は稀有といっても過言ではないでしょう。

図表 終結部のフーガ 各動機の組合せ

小節番号	356	360	364	368	372	376	380	384	388	392	396	400
第1Vn	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
第2Vn	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
Vla	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
Vc	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
Cb	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

Vn；ヴァイオリン、Vla；ヴィオラ、Vc；チェロ、Cb；コントラバス、Fl；フルート、Ob；オーボエ、Fg；ファゴット、Hr；ホルン

実はこの図表でわかるようにコントラバス(Cb)パートは20小節以上の休みの後に緑色の②の動機を弾きますが、当初は長い休みの数を数えるのが大変で、皆がそろって入るのが困難でした。でもこの曲の構造を知れば簡単なことで、動機②がヴィオラから始まり第2ヴァイオリン、第1ヴァイオリンと続きその次にコントラバスが入れば良いわけです。

楽器編成はフルート1、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部で、クラリネット奏者の妻は残念ながら降り番でした。皆様是非この名曲を聴いてみてください。

青・春・と・は

齊藤 徳 浩(昭32)

アメリカの詩人でサムエル・ウルマン(1840～1942)という人がいます。

「青春(Youth)」という詩が有名で、日本でも昭和初期にもてはやされたようです。

青春とは人生のある期間ではなく、心のもちかたを言う

.....

青春とは怯懦を退ける勇気、安易を振り捨てる冒険心を意味する

ときには、20歳の青年よりも60歳の人に青春がある

最初は私もなるほどと思いました。しかし、いや待てよ。今は疑問符のほうが大きくなってきました。

人間、年を重ねると見えてくるものがあります。何が見えるかということ、年齢に応じた覚悟、人生を達観するというか、掛値のない実像が見えてきます。他人の話を聞いていて「ああ、この人はまだ若いな」と思うことがあります。

では本当の青春とは何か。その人のその年齢のそのときにだけあります。それはそのまま記憶に留めておけばいいのです。高校時代の一日一日が思い出です。高校時代に演劇仲間と那須の合宿に列車に乗って行ったときです。車窓から入ってくる涼風に、女性徒との髪がなびいたあの瞬間、決して忘れることはありません。いまでも思い出すと涙が出てきます。

千葉城北会誌 第 20 号
令和 5(2023)年 11 月発行

城北会千葉支部

会 長 岡田 光正 (昭 35)
副会長 於保 洋生 (昭 35)
顧 問 齊藤 徳浩 (昭 32)

事務局 仲野 慎一 (昭 50)
後藤 公一 (昭 50)